

袁枚「鬪蟋蟀三十韻」通釈

Hihara, Tsutae / 日原, 傳

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

6

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002896>

袁枚「鬪蟋蟀三十韻」通釈

日原 傳

はじめに

本稿は清の袁枚（一七一六―一七九七）の「鬪蟋蟀三十韻」に対し、訓読と語釈を施し、加えて口語による通釈を試みたものである。本文は、周本淳標校の『小倉山房詩文集（上）』（上海古籍出版社、一九八八年）に拠り、王英志校点の『袁枚全集 壹』（江蘇古籍出版社、一九九三年）を参照した。

「蟋蟀」はコオロギのこと。コオロギを詠んだ古い詩としては、まず「詩経」唐風の「蟋蟀」や豳風の「七月」が挙げられよう。「蟋蟀堂に在り／歳聿に其れ莫れん」（蟋蟀）、「七月野に在り／八月宇に在り／九月戸に在り／十月蟋蟀我が牀下に入る」（七月）と、コオロギの気候の変化に応じて居所を変える性質を捉え、「季節の移り変わりを知らせる虫」として登場させている。また、「文選」に収める漢代の作とされる「古詩十九首」には「明月 皎として夜に光き／促織 東の壁に鳴く」とコオロギが詠みこまれている。「促織」というその名は、秋も深まるにつれて冬に備える手仕事之急がれるが、それを「せかすように鳴く虫」という意味の命名であるらしい。「季節の移り変わりを知らせる虫」「鳴く虫」としてのコオロギは以後も連綿と詩に詠まれてゆく。有名な杜甫の五律「促織」もこの系譜に連なる作品と言えよう。

一方、コオロギを詠んだ詩のもう一つの系譜として「鬪虫」として捉えた作品がある。コオロギを鬪わせて勝敗を競う「鬪蟋蟀」すなわち「こおろぎ合わせ」を詠みこんだ詩である。「鬪蟋蟀」に関する古

い記録としては「説郛」に収める宋の顧文薦「負喧雜録」に「鬪蛩も亦天寶の間に始まる。長安の富人、象牙を鏤みて籠と為して之を畜ひ、万金の資を以て之に一啄を付す。其の来たること遠し」とある。これによると唐の天寶年間（七四二―七五六）には既に「鬪蟋蟀」が行なわれていたことがわかる。詩に詠みこんだ例としては南宋の葉紹翁の七絶「夜書所見」が早いものとして挙げられる。転結句「知る兒童の促織を挑する有ることを／夜深うして離落に一灯明らかなり」の「挑」の字について小川環樹「宋詩選」（筑摩書房）は「けんかをさせることである」と注する。「佩文齋詠物詩選」の「促織類」には全部で十八首の作品が集められているが、そのなかでは明の朱之蕃の七律「促織」と明の張維の七律「戲題鬪促織」が鬪蟋蟀を詠みこんでいる。なお前者の詩を収める朱之蕃の「詠物詩」には和刻本があり、「和刻本漢詩集成 第十八輯」（汲古書院）にその影印が備わる。長澤規矩也氏の解題によると朱之蕃は万曆二十三年（一五九五）の進士であるという。李大猷纂輯の「蟋蟀譜」十一卷（一九三二年）には、鬪蟋蟀を詠み込んだ作品として、先に挙げた朱之蕃と張維の作品のほかには作者不明の「題蟋蟀詩」「題蟋蟀詞」や宋の濟顛和尚の「瘞促織詞」を収録している。袁枚の作はこれらの系譜を襲うものである。

「鬪蟋蟀三十韻」は上平声の一東と二冬の通韻で最後まで押している。以下、便宜的に十四章に区切って通釈を試みる。

—

児時不好弄 児時 弄るを好まざれど

雅好闘秋蚤 雅に好む 秋蚤を闘はするを

老至興不淺 老至りて 興淺からず

率衆時相攻 衆を率ゐて 時に相攻む

憑軾觀壁上 軾に憑りて 壁上より觀

擊節鼓胡嘯 節を撃ちて 胡嘯を鼓す

【語釈】

○弄 たわむる。あそぶ。「春秋左氏伝」僖公九年の伝に「夷吾弱不

好_レ弄、能闘不_レ過」。杜預の注に「弄、戲也」。

○雅 つねに。もとより。

○秋蚤 コオロギ。

○老至 「小倉山房詩文集」の配列によれば、この詩は乾隆二十三年（一七五八）に作られている。時に袁枚四十三歳。

○憑軾 車の前の横木にもたれる。戦いを見物するさま。「馮軾」に同じ。城濮の戦（紀元前六三二年）において楚の子玉が晋の文公に戦いを申し込んだ時の言葉を踏まえるか。「春秋左氏伝」僖公二十八年の伝に「請与_二君之士_一戲。君馮_レ軾而觀_レ之。得臣与_二寓_レ目焉」と見える。○觀壁上 壁上から觀戦する。自分の身を外に置いて勝負を傍觀する。「史記」項羽本紀に「当_二是時_一、楚兵冠_レ諸侯_一。諸侯軍救_二鉅鹿下_一者十余壁、莫_レ敢縱_レ兵。及_二楚擊_レ秦、諸將皆從_二壁上_一觀」。

○擊節 節を打つ。

○鼓胡嘯 「鼓嘯胡」に同じ。公言せず言葉を飲み込む。「嘯胡」は、のど。「後漢書」五行志に「請為_二諸君_一鼓_二嘯胡_一」。

【試訳】

子どものころ遊び好きではなかったが、

コオロギを闘わすことは好きだった。

年をとっても興味は尽きず、

仲間を集めて試合をする。

コオロギを戦いの場に出しては、闘盆のへりから覗き込み、

節を打ちつつ言葉を飲み込んで応援する。

—

選材必大閼 選材 必ず大いに閼し

焚山輒搜窮 山を焚きて 輒ち搜窮す

得一巨擘焉 一巨擘を得れば

文瓷以為宮 文瓷以て宮と為す

【語釈】

○選材 閼蟋に適するコオロギを選ぶこと。

○大閼 軍備の大檢閲をする。「春秋左氏伝」桓公六年に「八月、壬

午、大閼」。伝に「秋、大閼、簡_二車馬_一也」。

○焚山 山を焼いて狩をする。

○巨擘 仲間のなかで一番優れたもの。「孟子」滕文公下篇に「吾必以_二

仲子_一為_二巨擘_一焉」。

○文瓷 飾りのある養盆。「養盆」はコオロギの住まいとなる陶製の容

器。「蟋蟀盆」「養蠶」とも言う。ちなみに民国の李大猷「蟋蟀譜」

には龍や梅花などの文様をもつ養盆の図を十葉収めている。

【試訳】

良いコオロギを手に入れるには、大検閲が必要だ。
焼き狩りをしてまで捜し求めるのである。
ひとたび優れたものが手に入ったならば、
美しい養盆をその住居とする。

三

樹之螿孤旗 之に樹つる 螿孤の旗
築壇招群雄 壇を築きて群雄を招く
教戦如唆訟 戦はしむるは訟を唆すが如く
持草開金籠 草を持ちて 金籠を開く

【語釈】

○螿孤 春秋時代の諸侯である鄭伯の旗の名。のち借りて軍旗を指す。
「春秋左氏伝」隠公十一年の伝に「瑕叔盈又以「螿孤」登。周麾呼曰、君登矣。鄭師畢登」。

○築壇招群雄 礼を尽して群雄を招く。「隗より始めよ」という成語で知られる「築台募士」に基づく表現か。「戦国策」燕策二に「於是昭王為「隗築」宮而師之。衆殺自魏往、鄭衍自齊往、劇辛自趙往、士争湊燕」。

○唆訟 争うようにそそのかす。

○草 茜草。穂先でコオロギを挑発し、戦闘意欲を高める道具。

【試訳】

闘蟋の場に軍旗を立て、
礼を尽してコオロギの勇者を招く。

コオロギを闘わせるのは争いをそそのかすのであって、
その道具の茜草を手にして金色の虫籠の戸を開くのである。

四

其始体卑伏 其の始め 体は卑伏し
拗怒初興戎 怒りを拗へ 初めて戎を興す
徐徐低昂 徐徐に 脰は低昂し
霜刃将交鋒 霜刃 将に鋒を交へんとす

【語釈】

○拗怒 怒りをおさえる。「拗」は、おさえる。

○興戎 戦いを起こす。「戎」は、いくさ。

○脰 うなじ。くび。

○霜刃 鋭く光るやいば。賈島「劍客」に、「十年磨二劍、霜刃未二曾試」。

○交鋒 ほこを交えて戦う。

【試訳】

戦いの始めは体を低く伏せていて、
怒りを抑えて戦いはじめめる。
徐々に首を上げ下げし、
いまにも鋭い刃の切っ先を交えようとする。

五

牙摩疑纒繚 牙の摩すれば纒繚かと疑ひ

頭触愁共工

頭の触るれば共工かと愁へしむ

彌明拳足踰

彌明^{ひび} 足を挙げて踰し

叔孫当喉摺

叔孫 喉に当てて摺く

【語釈】

○摩 する。こする。

○獯豸 獣の名。「山海経」北山経に「其状如レ牛而赤身、人面馬足、名曰「窳窳」。「爾雅」窳獸に「獯豸、類レ獺、虎爪、食レ人、迅走」。

李白「梁甫吟」に「獯豸磨レ牙競二入肉一、騶虞不レ折生草茎」。

○共工 人面蛇身の神。顓頊と争い、天柱を折り地維を絶つたために天地が傾いたという（「列子」湯問篇）。

○彌明 祁彌明。春秋、晋の重卿である趙盾の家来。強力で知られる。

晋の靈公がけしかけた犬を蹴り上げてその顎を砕き、趙盾を守ったという。「春秋公羊伝」宣公六年の伝に「祁彌明逆而踰レ之」。

○踰 蹴り上げる。

○叔孫 叔孫得臣。春秋、魯の大夫。文公の命を受けて出陣し、狄を破り、長狄僑如を討ち取った。その際、同乗の富父終甥が矛で喉を突き刺して殺したことが、「春秋左氏伝」文公十一年の伝に「富父終甥、摺二其喉一以レ戈殺レ之」と見える。

○摺 つく。

【試訳】

コオロギの牙はこすれあうと獯豸かと思うほど鋭く、頭がぶつかる共工のように天柱を折るのではと心配になる。

祁彌明のように足で蹴り上げる力も強く、

叔孫得臣の故事のように敵の喉を突いて倒すのである。

六

道險一与一

險に道して 一と一

両将闘奔中

両将 奔中に闘ふ

伏已鹽其腦

己を伏せて其の腦を鹽り

博膺鉞交胸

膺を博ち 鉞 胸に交はる

【語釈】

○道險 険しい道をとる。「春秋左氏伝」哀公二年の伝に「三月、呉伐レ我。子泄率、故道レ險從二武城一」。

○奔中 小道。袋小路。「春秋左氏伝」襄公二十五年の伝に「行及二奔中一、將レ會」。

○伏已鹽其腦 城濮の戦（紀元前六三二年）における故事。晋の文公は楚の成王と戦う前夜に成王が自分を押し伏せて腦みそを吸つている夢を見た。子犯はそれを吉夢と解いたが、果して晋軍の大勝利に終わった。その結果、晋の文公は周王から駟者と認められた。「春秋左氏伝」僖公二十八年の伝に「晋侯夢下与二楚子一搏、楚子伏レ己而鹽中其腦上」。「鹽」は、すすする。

○博膺 むねを打つ。晋の景公がその死の直前に見た夢を踏まえる。大きな体の幽鬼が、地に届く長髪を振り乱し、胸を打ち、躍り上がって景公に迫った。のち景公の病は重くなり、秦に医師の派遣を求めた。「病、膏肓に入る」はその際の医緩の診断を典故とする成語。「春秋左氏伝」成公十年の伝に「晋侯夢大厲被レ髮及レ地、搏レ膺而踊曰、殺二余孫一、不義、余得レ請二於帝一矣」。

○鉞交胸 呉の公子である闔閭が王位を得るために呉王の僚を殺した事件を踏まえる。呉王をもてなす宴席で闔閭の家来の鱗設諸は魚の中に隠した剣を抜いて呉王を刺した。その時、王の護衛が左右から

刺した剣は設諸の胸で交わったが、痛みに屈せず呉王を弑殺した。
 『春秋左氏伝』昭公二十七年の伝に「縛設諸眞劍於魚中」以進。抽劍刺レ王。鉞交二於胸、遂弑レ王。「鉞」は劍の一種。

【試訳】

険しい道をとって一対一となり、
 二匹のコオロギは狭い場所であう。
 倒されて脳みそを啜られるような状況にもなったり、
 躍りかかり、胸で剣が交差するような場面もある。

七

銜枚悄無声 銜枚かんばい 悄しよとして声無く
 運翼如有風 運翼 風有るが如し
 瑟瑟園撃響 瑟瑟 園撃響き
 払払長鬚衝 払払 長鬚衝く

【語釈】

○銜枚 枚をはむ。「枚」は箸のような形の木片。両端に紐がついていて、くわえて首の後ろで結ぶ。兵士や馬にくわえさせて声をたてるのを防いだ。「銜」は、はむ。くわえる。

- 悄 物音がせず、静かなさま。
- 運翼 翅を振り動かす。
- 瑟瑟 ひっそりとしたさま。
- 園撃 コオロギの噛み合うさまを言うか。
- 払払 風の軽く吹くさま。

【試訳】

口に枚をくわえたように静かな時であれば、
 翅を震わせて風が吹いているような音をたてる時もある。
 ひっそりとしたなかでコオロギが噛み合う音が聞こえ、
 軽く吹く風に長い髭が突き出ている。

八

微覺昆喙息 微かかに覺ゆ 昆ともに喙かいかく息するを
 愈増羅鉗兇 愈いよ増す 羅鉗かの兇
 射肩猶能軍 肩を射られて猶ほ能く軍し
 傷股強鳴鏃 股ももに傷つけども強ひて鏃はしを鳴らす

【語釈】

- 昆 ともに。周本淳は固有名詞に解釈しているが、採らない。
- 喙息 苦しそうに息をする。「喘息」に同じ。『文選』卷十七所収の王子淵「洞籟賦」に「是以蟋蟀蚘蟻、蚊行喘息」。
- 羅鉗 羅希爽のくびかせ。羅希爽は唐の人。残酷な役人として同時代の吉温とともに「羅鉗吉網」と評された。『新唐書』酷吏伝に「温与二希爽一相勗以虐、号二羅鉗吉網一」。
- 兇 むごいことをする。王英志は「凶」に作る。
- 能軍 うまく戦う。「軍」は、軍を動かすこと。この句は「春秋左氏伝」桓公五年の記事を踏まえる。鄭の祝聃は王の肩を射たが、王はうまく戦って退却した。
- 傷股 股を負傷する。股は、もも。この句は「宋襄の仁」で知られる「春秋左氏伝」僖公二十二年の記事を踏まえる。宋の襄公は泓水おんすいのほとりで楚と戦った時、臣下の諫めを聞かず、敵が川を渡り終え、

陣形が整うのを待ってから攻撃を仕掛け、大敗を喫した。自身は股に矢傷を負い、側近の者はみな討ち死にしたが、襄公はなおその考えを変えなかつた。

○鏃 ほこ。

【試訳】

二匹が苦しそうにしていると、
羅希夷のくびかせのように締め付けがますますひどくなる。

鄭の祝聃に肩を射られた王のように、うまく戦って窮地を逃れるものもいれば、

宋の襄公のように傷を負ってもなお考えを変えず、正面から戦おうとするものもいる。

九

一擲出盆外 一擲 盆外に出すは

如喝泉盧紅 泉盧きんろの紅を喝するが如し

再戦不改期 再戦 期を改めざるは

如学楚子重 楚の子重に学ぶが如し

【語釈】

○喝 どなる。ここではさいころの望みの目が出るように大声で叫ぶさまを言うか。

○泉盧 とともに樽蒲しんぼ(はくちの一種)のさいころの出目の名。これらが出るるとほぼ勝負は決するよい目とされる。杜甫「今夕行」に、「馮

陵博塞呼「五白」、相蹴不三肯成「泉盧」。

○子重 楚の嬰齊。特別に選抜した軍を用いて呉を討った際、緒戦の

勝利ののち楚に帰り、その後の大敗を知らずに祝賀会を催した。しかし、その三日後に呉の追撃を受け、賀という重要な町を占領された。その結果、楚の人々は子重を非難するようになり、子重はそれを苦にして心疾になって死んだという。記事は「春秋左氏伝」襄公三年に見える。

【試訳】

擲り投げて盆の外に出すと、

樽蒲のよい賽の目が出た場合のように、それで勝負が決まってしまう。再戦の期日を改めないのは、

楚の子重の失敗を学んだかのようなのだ。

十

摩墨更靡旌 墨を摩し 更に旌はたを靡なかせ

逐北如飛蓬 逐北 飛蓬の如し

带断徇于軍 断きを帯びて軍に徇まふ

勇哉气矜隆 勇なる哉 气矜きんの隆たかなる

【語釈】

○摩墨 敵陣近くに迫る。「春秋左氏伝」宣公十二年に「許伯曰、吾聞致し師者、御靡し旌摩し墨而還」。

○靡旌 旗をなびかせる。

○逐北 逃げる兵を追う。北は、にぐる。

○飛蓬 風に翻って飛ぶよもぎ。

○带断徇于軍 「春秋左氏伝」襄公二年の記事にみえる秦嬴父しんえいふの武勇談を踏まえる。偃陽えんやうの城を攻める嬴父に対し、城方から長い布が降

るされた。董父がこれにすがつて登ると、姫壻に手が届いたところ
で守り手は布を切り落とし、董父は転落。するとまた布を垂らす。董
父は息を吹きかえしてまた登る。これが三度繰り返された。守り手
がそれで止めると、董父はその布切れを帯にして軍中を三日間巡行
した。原文の「帯_二其断_一以徇_二於軍_三三日_一」を一句に仕立てた。「断」
は、切断された布切れ。「徇」は、触れ知らせる。

○勇哉気矜隆 「戦国策」韓策二の聶政の故事を踏まえる。聶政は敵
遂に懇願されて韓の相である韓傀を刺殺した。事を終えたあと自ら
顔の皮をはぎ、目をえぐつて死んだ。政の姉は弟の名を揚げるため
にその遺体の身元を明らかにした上で自殺した。その姉の言葉の一
節「勇哉気矜之隆」を用いた。「気矜」は、氣勢。意気込み。

【試訳】

敵陣近くで旗を靡かせるように力を誇示し、
逃げる敵を追うさまは飛蓬のように敏速である。
布切れをまとい軍中を巡行した秦董父のように勝ち誇り、
聶政かと思わせるように勇ましく、氣勢盛んである。

十一

奏凱唱鏡歌 奏凱 鏡歌を唱へ
鼓翅如金鐘 鼓翅 金鐘の如し
漢有虫將軍 漢に虫將軍有り
母乃汝同宗 乃ち汝の同宗たる母からんか

【語釈】

○奏凱 戦勝の凱歌を奏する。

○鏡歌 かねを打ち鳴らしてうたう歌。軍楽。
○鼓翅 翅を振り動かす。

○虫將軍 曲成圍侯の虫達を指すか。漢の高祖に従つて碣より起り、
のち曲成侯に封ぜられる。都尉として項籍を破り、將軍として燕、
代を撃つたことが、『漢書』高惠高后文功臣表に見える。

○母乃 ……ではないだろうか。推測を表す。

○同宗 同じ血統の者。

【試訳】

戦勝の凱歌を奏すべく、
翅を振わせて鳴くその音色は鐘を打ち鳴らしたかのような。
漢代には「虫將軍」がいたが、
おまえの同族ではないだろうか。

十二

敬汝矜而争 汝の矜にして争ふを敬ふ
比党非螭螭 比党 螭螭に非ず
愛汝勇而仁 汝の勇にして仁なるを愛す
螫人非并蜂 螫人 并蜂に非ず

【語釈】

○矜 ほこる。自信をもつ。一句目、二句目は「論語」衛靈公の「子
曰、君子矜而不争、群而不党」を踏まえる。

○比党 徒党を組むこと。

○螭螭 シガバチ。腰細蜂。

○仁 他者を思いやる気持ち。孔子のとなえた最高の徳目。三句目は

【論語】憲問の「仁者必有勇、勇者不仁」を踏まえる。

○螫人 人を刺す。「螫」は、毒虫がさす。

○井蜂 虫名か。語の用例としては「詩経」周頌・小毖の「莫予井蜂」自求「辛螫」が挙げられる。毛伝は「井蜂、摩曳也」と注し、「引きまわす」の意にとっている。朱熹「詩集伝」は「井、使也。蜂、小物而有毒」と注する。しかし、同じ形をとる二句目から考えて、「蠨蛸」と対応する虫の名としてここでは用いているように思われる。

【試訳】

おまえが自信をもつて相手と戦うのを私は敬う。

ジガバチのように徒党を組むことはない。

また、おまえが勇敢で仁の徳もあわせもっていることを愛する。

「井蜂」のように人を刺すこともない。

十三

飲汝以勇爵 汝に飲ましむるに勇爵を以てし

蝸触漸戸饗 蝸触 漸く饗を戸る

偶汝以新牡 汝に偶するに新牡を以てし

字微声雍雍 字微 声雍雍たり

【語釈】

○勇爵 勇士に与える酒杯。また、勇士に命ずる爵位。ここでは前者の意か。「春秋左氏伝」襄公二十一年の伝に「莊公為二勇爵」。

○蝸触 蝸牛の左の角に国を構える触氏を指すか。「莊子」則陽に「有下国」於蝸之左角」者上曰「触氏」、有下国」於蝸之右角」者上曰「蛮氏」、

時相与争レ地而戦、伏尸数万、逐レ北旬有五日而後反」。狭い闘盆での戦いを「蝸牛角上の争い」に喩えたものか。

○戸饗 煮炊きをする。「詩経」小雅・祈父に「有」母之戸」饗」。毛伝に「熟食曰レ饗」。

○新牡 若い牡。「春秋繁露」循天之道に「新牡十日而一遊」於房」。

○字微 交尾する。「史記」五帝本紀に「鳥獸字微」。

○雍雍 鈴の音のやわらいださま。「礼記」少儀に「嚮和之美、肅肅雍雍」。孔穎達の疏に「雍雍是和貌」。

【試訳】

おまえに勇士に与える酒杯で酒を飲ませ、

闘いを終えたあとの食事の用意をする。

おまえを連れ合わせるのは「新牡」の待遇ですが、その交尾の際はやわらいだ鈴の音が聞こえてくる。

十四

十月入床下 十月 床下に入り

懶婦驚殘夢 懶婦 殘夢を驚かす

寄語哲族氏 語を寄す 哲族氏に

牡鞠休熏烘 牡鞠 熏烘することを休めよ

我続蝻伝 我は続く 蝻伝

自笑本雌虫 自ら笑ふ 本より雌虫なるを

【語釈】

○十月入床下 「詩経」豳風・七月に「七月在野、八月在宇、九月在戸、十月蟋蟀入我牀下」。

○懶婦 なまけ女。また蟋蟀の異名でもある。陸機「毛詩草木鳥獸虫魚疏」の「蟋蟀」の項目に「楚人謂之王孫」。幽州人謂之趨織」。里語云、趨織鳴懶婦驚。是也。

○残夢 明け方に見る夢。されぎれの夢。

○哲族氏 周官の名。「天鳥」を除くことを掌る。ここには本来あとに見える「牡鞠」を焚いて「鼈胆」を除くことを掌る周官の「蠃氏」の名が来るべきか。

○牡鞠 牡鞠と同じ。花の咲かない菊。焼いて灰にして撒くと、鼈胆を除くことが出来るという。「鼈胆」は、カエルの類。「周礼」秋官・蠃氏に「去鼈胆、焚牡鞠、以灰洒之則死」。

○蝻伝 宋の柳宗元の作品。「蝻」は虫の名。物を背負うことを好み、苦しんでもやめないという。

○雕虫 詩文の字句を飾る。

【試訳】

十月になると床の下に入ってきて、

コオロギに暁の夢を驚かされる。

哲族氏にことづてをする。

牡鞠を焼くことはやめよと。

私は柳宗元の「蝻伝」のあとを継ぎ、

コオロギを詠んだ詩を細工したまでのこと。

付言

袁枚の「鬪蟋蟀三十韻」は、詠物詩として正面から「鬪蟋蟀」の世界を詠んだ作品である。三十韻という長編のため様々な角度から細かくその世界を歌い上げている点に特色がある。典故の面から言えば、

「鬪い」をテーマにした作品であるという性格に由来するためである。『春秋左氏伝』の故事を踏まえた表現が目につくことが指摘できる。性霊説を主張した袁枚は「随園詩話」のなかで神韻説を主張した王士禛（一六三四―一七一）のことを「修飾を主として性情を主としていない。どこかに行けば必ず詩を作り、その詩の中には必ず典故を用いているのを見ると、その喜怒哀楽の感情は真のものではない（巻三、二十九）」と批判しているが、それは性情を重視しないことに対する批判であって典故の使用そのものを批判している訳ではない。『随園詩話』の別の箇所では、典故を用いる時はあからさまな痕跡が残らないようにするのが大事であり、そのためには孜孜として勉強することが必要なことを説いている（巻六、二十二）。典故を多用した本詩はその一つの実践と言えようか。